

第六期武蔵野市コミュニティ市民委員会

第15回委員会

議事概要

日 時：平成21年10月15日（木）18:30～

場 所：武蔵野市役所 811 会議室

出席委員：高田委員、江上委員、小木委員、橘委員、渡邊委員、井原委員、和久田委員、
井波委員、近藤委員、増田委員、清本委員、西村委員

1. 議事

・最終報告の作成に向けて

「パブリックコメント及び地域別ヒアリングの結果を受けた対応方針について」

（高田委員長） それでは最初に、最終報告の作成に向けてについて話し合いたい。資料1に関して説明いただきたい。

・コンサルタントより資料の説明

（江上副委員長） 全体をみて感じるのは、この報告書に書かれている全体的な流れ、ストーリーが理解されていない、伝わるように書かれていない。

（高田委員長） 全体的話となると、それほどたくさんの方がヒアリングに来なかったことをどう判断すればいいのだろう。今、コミュニティづくりに関して、大きな争点がないのではないかと思ったが、どうだろう。

また、江上副委員長が説明したように、議論の材料として提供しているので、各コミセンで議論してほしいが、それほど深く議論されていなかったようだ。

先日、この意見が出た時にコミ研連に出かけていった。そこでは、たくさん意見が出て、報告事項に終わって、研究の部分が欠けているなど、意見がなかなか活発だった。その時も、この中間報告を取り上げて、議論をして、意見を出したというコミセンは、それほどなかったようだ。けやきでは議論したのか。

（島森委員） 代表委員や事務局の方など、何人かで議論した。

（高田委員長） 運営委員会ではやっていない。

（橘委員） 中間報告が発表されたのが8月で、時期が悪かった。夏休みで、運営委員会の日程と合わなかったのが、皆さんに渡せなかった。1ヶ月以上タイムロスがあるので、

本格的に議論されるのは、多分今月10月か11月の運営委員会ではないだろうか。「自由に持って行ってください」とするのではなく、まず運営委員会で全員に渡して、これを検討することを明確にしないと、なかなか議論できないのが実態だ。

また、研連ではある程度活発な意見が出るが、それは相当問題意識を持った人たちが委員長、副委員長になって、各コミセンを代表してきているからだ。一般の運営委員とは、意識レベルに相当な差があるのではないだろうか。研連で出た意見が、即コミセンを背負った意見だとは、受け取っていない。

(高田委員長) 研連の時も「これは、私個人の意見ですが」と限定付で話している方が何人かいた。

(橘委員) コミセンで議論されていないから、そのような言い方になる。

(高田委員長) 今、個別のところより、全体の流れについて理解されていなかったと、江上副委員長の発言があった。これからどうやっていくか議論しようか。

(江上副委員長) たとえば、イベントについて抜本的か、根本的か、見直したほうがいいと言っているが、その理由は、ほとんど理解されていなかった。

また、地域課題にどう対応するかについても「これだけ今、忙しいのに、地域課題に対応といわれても困る」という意見がかなりあった。それはそうではない。

(高田委員長) 地域課題に関する議論は、特に課題に取り組むのではなく、議論しているうちに自然に課題が出てきて、そこで発展的に取り組むと説明し、ヒアリングでの議論で話した。

(江上副委員長) 話せば伝わるが、報告書を読んだだけではなかなか伝わらない。地域での話し合い、おしゃべりの中からいろいろな課題が出てきて、それが参加した人たちがやりたいことだから、それができるようなコミセンにしていこうと言っている。それを実現するためにはどうすればいいのか、と遡れば、強制的に参加しろというのではなく、友だちをどう作るかだろう。だから友だち同士のおしゃべりが大事ということから始まっている。その流れ、ストーリーが、この報告書を読んだだけでは、必ずしもうまく伝わっていないのではないか。

(高田委員長) 最初に土台と活動に分け、そこからやっていった。つながりの場、出会いの場を作っていかなければいけないというのが、流れの最初だ。そこから何かがあってもとのところに来ているということだが。

(江上副委員長) ひょっとしたら、この流れでないほうがいいのかも说不定。たとえ

ば運営委員のなり手がなくて困っているから、どうすればいいかと。中部ヒアリング（芸能劇場）の時に、今のコミセンはやりたいことができる場ではなく、やりたくないことをやらされる場だと市民の方々は思っているのではないかという発言をした。そういう方々の心を解きほぐし、コミセンは、1人1人が持っている夢や思いを持ち寄って、それをつなげて地域の中で何かを実現するという志を持った場なのだと伝えるには、どうすればいいかということだ。

多分、今言ったような志や夢は、ある程度共有されているのだろうが、「地域課題解決に取り組むのだ」と言われると、自分の感心がないような、興味が持てないようなことを手伝わされると思ってしまう。また、これまで参加していた方は、さらにいろいろなものを背負い込まれると感じ取られるのではないか。

中間報告書の構成も、たとえば、役員のなり手がいない、参加者が少なくて困るという現状を、どうすれば克服できるのか、という具体例から始めてもいい。

（高田委員長） 総会の参加者を増やすということもある。

（江上副委員長） そのためには、ポスターをたくさん作るのではなく、非常に遠回りかもしれないが、友だちを作る、人と人とのつながりを少しずつ付けていくという方向があるという提案だ。

（高田委員長） 最初の窓口から考えると、現在のコミセンにいろいろな問題がある、問題について解き明かしていくと、という流れがあって、最初の、人とつながりを持つ出会いの場という流れが続いているということだ。委員の皆さんが読んで、どのように感じられたらどうか。

（西村委員） 委員ではない人が、これを読んだ場合、なかなか意見は出ないという気がした。そこが問題だ。先日の、3つの会場のヒアリングで意見を伺って、私の中で肉付けができてきた。この委員の中の意見の違いが、あのヒアリングの中で分かってきた。その中のいくつかは、解決しないと報告書にならないだろう。

南町コミセンを例にすると、誰かが思いを持ってやることを、共有したい人が集まって来るようだ。先ほど資料（パンフレット）を配ったのは、そのためだ。

環境ネットというのがあって、コミセン主催のものからNPO的なものまでが、ネットワークを作って環境フェスティバルをした時のパンフレットだ。これだけたくさんのグループがつながっている。つながりの中心になったのは、ゴミの問題だったが、どんどん変化して行き、今はゴミというよりも環境、その中でも育てる、畑で野菜を育てる、その前

には肥料を作るなど、いろいろなことが全部つながっている。そういう強い思いを持った人、思いを持ち続ける人がいて、その回りにいろいろなグループ、すでにあったものと、出てきたものも含めてつながっていった。環境ネットというのは、ある意味でコミセンが事務局的な役割をしている1つの分野だ。その中で、逆に今度は友だちができてくる。どちらがあとか先かではなく、動いているものだから、先になったり、あとになったりするのだと思う。

(高田委員長) 今の話は、どこにつながるのだろう。ヒアリングを重ねて、言及しなければいけないものが明らかになったとのことだが。

(西村委員) コミセンの役割の1つは、このように地域をつなげていくことだ。友だち同士がそこで話し合っていて楽しいということから、いろいろなことが起こってくるのだが、その1つの変形として、思いを継続して持っている人がいる場合、そこにネットワークができる、それはコミセンがなければできてこないと思った。そういった意味で、コミセンは、地域の活動の扇の要または核になる。

(江上副委員長) 念のために、「コミセンがなければ」というのは、場所としてのコミセンと、つなぎ役としてのコミュニティ協議会の、両方のことか。

(西村委員) そのとおりである。場所と同じように広報を持っているコミュニティ協議会も非常に大きい。

(清本委員) 私の中では、コミュニティ協議会やコミュニティセンターが自分の思いを実現する場になっていない。コミュニティセンターではなく、たとえば協働サロンであったり、NPOネットであったりする。たとえばまちづくりについて仲間を作りたい場合、自分たちで立ち上げていろいろなところで会合をして今日まで来た。それができあがってから、場所としてコミュニティセンターを利用しているが、コミュニティ協議会の中にそれを持ち込んで、グループとして立ち上げようという発想はまったくなかったし、今でもない。それは、コミュニティ協議会の活動が活発で、そういうものを受け入れてくれる、個人の思いが形になって1つの組織になっていく役割を果たしてもらった経験がないからだ。

(高田委員長) 私が大きく思っているのは、最後に出てきたような行政の役割だ。行政の役割と、今、武蔵野市でやっているのはコミュニティ協議会だから、コミセンが焦点になっている。もう1つ、今、出たNPOがある。これはコミュニティづくりで、コミュニティ市民委員会だから、別にコミュニティ協議会に限ったわけではないわけで、その辺ま

を含めたところを拡大して、今は出す時期ではないかと思っている。もう少し広げて言ってもいいと思っている。しかし、それを言い出したら大変なことになるので、どこまで書けるだろうか。

(渡邊委員) この中で、全般としてコミュニティ活動のおもしろさ、楽しさについて盛り込むと書いてある。運営委員が少ないとか、役員のなり手が少ないというのは、むしろそのような考え方自身がバリアになっているのではないだろうか。何かをやりたいという人の自主性を最大限に尊重すれば、その人自身がまた友だちづくりなどをする、となるように調整していたら、運営委員のなり手が少ないというのは、むしろおかしな考え方だ。誰でもなりたいのではないだろうか。

それから、事業については、今言った分析を通じて、コミュニティ活動の目的のようなものをそれぞれ意識的に持つことが、重要だ。特に役員や運営委員が提供する事業については、いつでも意識的にやってもいいのではないか。事業についても、いつも同じ人がやるのではなく、新しい人が少なくとも2割、3割出ることを目指そうと意識的に取り組めば、広がっていくのではないだろうか。

また、事業にしても、よく実行委員会方式というものを使う。役員会や協議会が行うと、それぞれの分担で、役員が少しもやってくれない、運営委員が協力してくれない、ということになりがちだが、そうではなく誰でも参加できる、自主的に参加できる、仲間を連れてきて参加できるところに、実行委員会制のよさがある。しかし、実行委員会を開いて委員長が実行委員長になるようでは、実行委員会としての広がりができない。目的意識的に実行委員会を作ったら、誰でも参加可能な形でおこなって、その中で自発性が出てきたものを大いに取り上げることが大事なのではないか。

同じように、窓口の問題について、例えば「これを貼ってくれないか」と要請する人が来た場合、それについてあれこれ質問されると、嫌気が差してくる。窓口では、明らかにおかしくなければ、その主旨をよく聞いて、事前チェックは行わず、事後チェックに徹底することにして、全部受け入れる方向にしたほうがいい。

運営委員会でも、誰でも自主性を尊重して参加させていくことにおおらかになれば、運営委員のなり手が多くなるし、やってみたいという人が多くなると、自分で行事をやっても実感する。役員もそれぞれ都合があるわけだから、出てこないことを追求するのではなく、出てくる人によってできることだけやって、無理をしないことにすれば、役員も増えていくと思う。

入れ物となるコミセンがあって、そしてそれを管理することは、大変有利で、その有利な点を生かして、やっていけばいい。

もう1つ、自分も入って決めたことは守ろう、守れなかったらあやまる、どうしてもだめならまた改定するという主旨を徹底すれば、そんなに難しいことではない。そういったおおらかな態度でやっていけば、運営委員会の人も、いい人が来ると思う。

(高田委員長) 今の発言は、中間報告には、コミュニティ協議会のところに入れようか。コミュニティ活動は楽しいのだという項目を作って、入れようか。

(井原委員) 先日出席して、私は、コミュニティと協議会が一致していないと言った。何度も話を聞いているが、コミュニティそのものについて、このような委員会で結論が出るのだろうか。協議会については、方法論の問題だから、いずれ解決策が出るだろう。

それよりも、協議会の人たちが背負い込みすぎている中で、今話し合っていることをどうやって伝えればいいのか考えた時、渡邊委員の発言について、伝わる部分はちゃんとあると思う。

(清本委員) 中央コミセンでヒアリングをした時に、3人寄れば実行委員会ができるというようなことを言っていた。管理だけがコミュニティ協議会の仕事だと思っている協議委員が多すぎて、それが楽しくない大きな原因ではないだろうか。

先ほどのポスターの例ではないが、何か持っていても、いろいろな理由で断られる。そうすると、市民の活動の拠点にはなり得ない。

(高田委員長) 「コミュニティ活動の全般」と書いてあるが、おもしろさ、楽しさについて盛り込むということが最初に出ている。対応方針の「Ⅱの冒頭などに」は、「コミュニティの活性化に向けて」というところで、コミュニティ協議会から出発している話のところだ。コミュニティ活動のおもしろさ、楽しさというのは、協議会の対応のところを書くのか。

(コンサルタント) コミュニティ協議会に限定した話ではなく、もう少し全体的な話として、コミュニティ活動というのはそもそも楽しいものだということを、再確認する上でどこかに入れたかったので、場所はここでなければいけないとこだわるものではない。あるいは冒頭にあったように、全体のストーリーの中で位置付けていった方がいいのであれば、そうする。

(西村委員) このコミュニティ市民委員会で考える範囲は、基本的に地域コミュニティだと思っている。目的の場合も地域の中の目的別コミュニティであって、全市的なNPO

や全市的なサークルは全然考えていない。多少例外はあるとしても、基本的に地域ということにこだわって話し合う場だと思っていたが、それで正しいのだろうか。

(高田委員長) コミュニティだから、もう少し、コミュニティづくりなどを考えたらどうかと思っている。思いとしては地域コミュニティだが、その中にNPOも入っていると思っている。

(西村委員) 地域の目的別コミュニティはいい。ただ、全市的なNPOまで広げて考えなくてもよいのではないか。

(高田委員長) NPOなら全市的になっても、全然かまわないのではないか。

(西村委員) NPOはかまわない。ただ、コミュニティ市民委員会で考える対象、範囲という、その辺は整理しないと。

(江上副委員長) たとえばどこかの地域、どこかのコミセン、どこかのコミュニティ協議会、あるいはどこかの地域の住民が、まちづくりのことを考えようと動き出したとする。その時に、全市的に活動しているNPOなどの力を借りるという連携の仕方もあるだろう。ということが起きるかもしれない、というのが高田委員長の発想だと思う。

(橋委員) 先ほど、管理運営の話が出た。実は16コミセンある中で、昔の名前はほとんど、「管理運営協議会」だった。それが10年ほど前に、「管理運営」を取った。管理運営というのは、コミュニティの考え方とは違うと強力に提案して、名前を変えさせた。管理運営というものは、皆さんの意識が変わってきている。

センターと協議会という箱ものと組織体を、現実に運営委員自身、ごちゃごちゃに使っているから、ちゃんと分けて使おうということもあった。

(高田委員長) 事務局のほうで、センターを切り離してコミュニティ協議会にしたということは、たとえばセンターに管理運営を限るのではなく、コミュニティづくりまで広げるといった意図があったのか。

(小木委員) そうだと思う。そういう話し合いがあつてされたことだ。

(江上副委員長) 三期か四期ぐらいに、コミセンづくりからコミュニティづくりへと、基本的な方針を転換した。

(渡邊委員) 第五期の市民委員会の時にずっと論議されてきて、討議要綱が出された。条例を作った時から、その中でコミュニティ協議会が位置付けられたので、名称も、協議会ということで統一的な名前と呼ばれて、なおかつ協議会のあり方までも条例に規定した。

それを受けて、非常に成熟してきた中での、コミュニティセンターやコミュニティ活動

のあり方を抜本的に見直し、自主三原則についても進化した方向で論議するよという
のが、今度の市民の入った調整計画の中の提言を受けての第六期だと思っている。今期は
長期総合計画の前倒しによる調整計画の論議の中で、緑・環境・市民生活というジャンル
でこのことが論議されて、その中で今の問題が論議され、コミュニティの活性化、質的向
上、進化ということ抜本的に検討する必要があるということで、第六期市民委員会の答
申を促すような、調整計画ができあがって、今日に至っていると理解している。

その中で、窓口ばかりを標的にするような感じがした。しかし、条例の中には、協議会
自身が民主的な運営をされるための要件がいくつかある。住民総会、運営委員会、役員会、
選出の仕方までであるが、それが理解されず、住民総会と言いながら、十数人の集まりで人
事を決めたり、対立を煽ったり、ということが散見される。これこそ、一番コミュニティ
の活性化の障害になるものだと思う。すぐに決を採る、対話を続けていかない。コミュニ
ティ協議会が議論する場合、常に満場一致を目指し、粘り強く話し合っていく雰囲気、
最近では切れているような感じを受ける。意識的な人がそれを見ると、近寄らない。そう
いうこともコミュニティづくりの障害になっているのであって、窓口ばかりを批判するのは
おかしい。

また事業を抜本的に見直す点について、一生懸命ボランティアでやっているという意識
があるので、その意見に反論がでるが、やはりマンネリ化することがある。その1つには、
事業予算の補助金の組み方にも問題があると思う。しかも役員や運営委員の任期は1年で、
早い段階から具体的な事業の細目を要求しないと補助金が付かないという制度がある。予
算が決まると、今度はそれが桎梏になる。自発性を担保するようなことになっていない。
今回の問題も窓口ばかりに焦点を置いて、コミュニティづくりがいろいろ問題だという評
価は賛成できない。

(高田委員長) 今の話は、問題点だ。

(増田委員) この前、ヒアリングの意見を聞いて思ったのだが、報告書の受け止め方
について、それぞれ感覚に隔たりがあるように感じた。協議会は問題を解決しなければい
けないとか、それをはっきりさせて欲しいという意見があったようだが、住民は、コミュニ
ティセンターを、主体的に課題解決に取り組む存在として見ているのではないだろうか。
一緒にコミュニティセンターを作っていくのではなく、コミュニティセンターのお客さん
的な考え方ではないかと、協議会の関係者以外の方が先日、そんなことを言っていたよう
だった。そうであれば、コミセン活動に参加して、サービスされる側から、する側にあえ

てなりたがる人がいるのだろうか。

最終報告書では、そういう人たちに認識を新たにしてもらうために、素っ気ない書き方ではなく、もっと分かりやすく、メッセージとして、住民全体でコミュニティセンターを作っていくということを、分かりやすい表現で、訴えかけるような感じで報告書を書いてもいいのではないか。

(高田委員長) どの辺で訴えかけようか。

(増田委員) 先ほどの渡邊委員の意見は、とても分かりやすかったので、そうした感じで、散りばめるのはどうだろう。

もう1つ、あるコミセンの利用者懇談会に行った際に、「利用団体から運営委員は出してもらえないか」と聞いたが、「何度も言っているが応じてもらえない」とのことだった。結局、利用団体の方も、利用はしたいけれど、運営委員になりたがらない人が多いようだった。日頃出入りしている人たちがコミセンをやりたいくないなら、それをもっと問題視すべきだと思うが、そこで終わってしまっているようだ。

(高田委員長) 利用者懇談会で、中から運営委員を出してくれと言っても、運営委員は出さないと。

(増田委員) つまり、利用団体から出すということではなく、出入りしている人たちがコミセン運営をやりたいがらないなら、どうしたら希望者が増えるのか、どうしたら運営に携わってもよいと思えるのか、そういうことをこの委員会として分かりやすくメッセージを出したいと思っているのだ。

(島森委員) 全般のところの「人々が生き生きとするようになるものを目指す」ということだが、これは実際に活動に関わっている、運営をしている人たち、やっている方々が、楽しくなければ、それはいくら言葉で言っても伝わらない。

ただ、事務的にやるというものの中にはあるだろうが、コミュニティ協議会に興味を持ってもらうためには、何かPRするものがあって、それには、市も何かの形でPRすることも考えられる。あるいは、市の中や研連のホームページなどで、はっきりと「このような参加ができる」とか「このようなことをやれる」ということを、柔らかく、分かりやすい言葉でPRすることも必要だ。

アンケートの中にも、若い人、20代の人参加してみたいと思っているという意見もあったが、どんなことに興味あるのかが分からないので、それを把握できる窓口を作ることが必要ではないだろうか。

また、役割・機能にそれがつながっていくのは、協議会をやっている人自身が、コミセンに出かけていくことで、自分が役に立っていると感じると、喜びがある。協議会そのものも、参加した人が生き生きできるような工夫が必要だと思う。

役割・機能のところで、どこも高齢者が増えてきているので、バリアフリーの対応をこの辺で考えておくべきだ。

バリアフリーだけではなく、赤ちゃんに対してもそうで、赤ちゃんを寝かせられるベビーベッドが必要だ。要するに心配りだ。現在あるコミュニティセンターに、たくさんの市民に来てもらうためには、そういう工夫も必要だ。

その他、アンケートの中では市民が求めていることで、防災などがとても関心が高かったが、コミュニティセンターに求めているわけではないのではないか。ただ、そういう意識を高める、他の団体とつながって、防災もみんなで考えることも1つの問題なのではないだろうか。

(小木委員) コミュニティセンターあるいはコミュニティ協議会について、市ではホームページで書いているのか。

(事務局・森安) 紹介はしている。

(小木委員) 今、何かを調べる時は、大抵インターネットのホームページで調べる。そこで少しアピールするような形であれば、興味を持たれる人がいるのではないかと。

この報告書自体を話のネタにするには、市民には少し取っつきにくかったのではないだろうか。もう少し市民が興味を持てるように、あるいは問題点や苦情をどこかで受け入れやすい形を、行政のほうで作っていただけたらいいのではないかと。

(事務局・森安) 今の小木委員の発言について、ホームページへのアクセスはそれなりにあるのだろうと思っている。全国の自治体から年に10回ぐらい視察があるが、ホームページを参照して、コミセンの見学に来る場合がある。それぞれのコミセンで作っているものについては、それを参考にして来られるぐらいの中身のものもあるだろう。

今回の中間報告について、私の一方的な理解かもしれないが、極論すればコミセンというのは、気軽に立ち寄れて、ずっといたくなる居心地のいい場所にしよう。コミセンで行う事業は、言い切れば、友だちづくりを手伝ってあげればいいのだ。イベントもそのきっかけになるようなものに収斂していこう、と伝えたかったのだと思うが、それがうまく伝わっていないという意見が多くの方から出ていた。だとすれば、書き方として、市民が手に取って、「やはりそうなのだ」という議論が起きる、理解が落ちるようなものにしなければ

ならないのなら、どういったところが足りないのかも、ご指摘いただければありがたい。

(小木委員) 報告書にイラストなどを使った時もあった。あの手法は、手に取って見てみようかと親しめる。

(事務局・森安) 以前は、表紙など、イラストは職員が描いていた。たとえば、この中間報告の中に流れているストーリーについて、理解されなかったとすれば、それはストーリー自体を間違えていたのか、あるいはストーリーの伝え方がうまくなかったのか、ということなので、それを議論すると、よりよいものになるのではないかと。

(小木委員) たとえば、難しい説明の横に四コマ漫画が付いていて、その漫画を読んで理解できることがよくある。

(和久田委員) このような書き方だと固い感じだ。最初に「これからのコミュニティとは」や「輝くコミュニティとは」などの、違った表題にして、その下に「第六期武蔵野市コミュニティ市民委員会の報告」などとしたらどうか。

利用者からは館貸しだけのように取られがちだが、そうではなく、コミセンの運営委員になると、楽しいこともできると伝えられるように変えていかないと。

(高田委員長) コミセンのパンフレットならいいが、これは報告書なので。

(井原委員) 手に取るかどうかといえ、私は手に取らない。私には、コミュニティという言葉そのものがピンとこない。委員会で話しをして、活動と土台に分けられているから、自分の考えていたこの部分の話だとわかるが、普通に見ると「コミュニティとは何だ？」となるし、コミュニティ協議会、市民委員会と書かれていてもまず見ない。「コミュニティセンターの利用率を上げるための委員会」と書いてあれば、利用している人たちは「私たちの今までの鬱憤晴らしができるのかしら」「よかったところをほめましょう」と思うかもしれないが、コミュニティと書かれているだけだと、どうだろう。

もう1つ、今、武蔵野市の中で足りないものに対する要求がある場合、多少興味も湧くだろうが。もう少し地域とつながりが欲しいとアンケートに答えた人たちは、まず来ていない。果たしてそれはどういったことなのだろう。

(高田委員長) コミュニティについて、今、市民の間でそれほど問題を感じていないのではないだろうか。

(井原委員) もしかしたら関心がないという部分になるのではないかと。

(高田委員長) どこが問題かというところだね。これを報告書にまとめる場合、何か形にする方向で言えば、どのようなものが欲しいのだろう。

(コンサルタント) 場所をどこにするかは分からないが、コミュニティの活性化に向けての前半のところにあった、コミュニティ活動のおもしろさ楽しさについて盛り込む。まずは全体として分かりやすくするということ、あとは全体のストーリーとして、そもそもあるべき姿を目指して、地域に課題解決ありき、という形ではなく、人のつながりづくりをする場としていこう、という全体的なストーリーをどこかに加えたい。

表現、体裁についてももう少し分かりやすくすることと、全体的なストーリーを付けるということ、あとはコミュニティセンターについての誤解と言うか、コミュニティ協議会がサービスの供給側として、全部やってくれるという誤解もあるようなので、そういう誤解を解くような表現も加えていくことが必要なのではないかな。

また、決めていただきたいこととして、少なくとも行政とコミュニティ協議会との関わり方についてどうするかについて、意見や、方向性をいただきたい。

(事務局・盛田) 年末を目処にしているが、まだすぐというわけではないし、ヒアリングもおこなわれているので、それについて、感じたこと、あるいはこの報告書の中に、ぜひ入れて欲しいものがあれば、早いうちに出して、それについて話をさせていただいて、報告書につけ加えるという形になると思っている。

(江上副委員長) 今後議論していただきたいのは、ボランティアとは何かだ。もっと早く議論すべきだったが、報告書全体の論調にかなり関わってくる問題なので、議論したほうがいいのではないだろうか。

もう1つ、コミュニティ活動は楽しいという話だが、楽しいという意味は、非常に複雑で、多様な楽しさがある。「楽しい」とだけ言ってしまうと、いろいろ誤解を招きそうな気がする。

(橘委員) 1つ例をあげると、うちでは日曜日にパソコンをやっているが、もう4、5年来ている89歳の方がいて、パソコンが楽しくてしょうがないと言う。このような場に参加し、パソコンもできるようになって、毎日が楽しくてしょうがない、「本当にありがとう」と言われる。それを聞いて、私もうれしくなる。感謝されることを期待してやっているわけではないが、やっていてよかったと思う。それがボランティアとしてやっていて、うれしい、よかったということではないだろうか。

(江上副委員長) そういう思いを、「おもしろい」というひと言では表しきれないので、そこをうまく表現できないだろうか。

(清本委員) キーワードは、自己実現ではないだろうか。楽しさの中身は、自分が達成

できた、そういう楽しさだと。

(橘委員) 私自身の実現もあるが、利用者の方の自己実現を私も身近に感じて、共有するということだ。

(江上副委員長) 言いたいことは、そういう喜びをどのように表現して伝えたらいいかだ。

(増田委員) 報告書の中の下に、コラムのように囲んで、その中にエピソードを入れるのはどうか。

(小木委員) 実際の体験談というのは、非常に分かりやすい。そういう意味で、東町の九浦の家でやっている女子大通りからの右折禁止の署名運動があって、成果を上げつつあって、地域の人たちみんなで問題解決に取り組んだという満足感がある。所々にそういう実話をエピソードとして入れたらどうか。

(渡邊委員) 中間報告の下の囲みの中に、いろいろ事例が書いてある。アンケート調査だけではなく、今紹介されたいい話も、この中に入れて、全体の問題提起の中の1つにするといいかもしれない。

(西村委員) コミセンのプラスの実例をある程度書き込むことで、読み手に伝わるのではないか。問題について、まだ話し合いが足りないので、回数を増やすとか、期間を延ばす必要があるのではないか。

(和久田委員) 多分今回も読んだ人が少ないのは、いつもの堅苦しい報告書だという印象があるからではないか。

(井波委員) 3回のヒアリングに、現役の運営委員が一度も参加しなかったコミセンもあるようだ。一般の人は別にしても、実際に運営に関わっている方たちすらあまり読んでいないのが現実だ。それは、タイトルの問題ではない。中間報告だから興味がないという理由もある。表紙の問題だけではなく、もともとの意識の問題が根底にあるのではないだろうか。

(井原委員) 表紙にインデックスを入れて、内容が表紙に書いてあれば、多少は興味が広がるのではないか。

回数を増やすかどうかの質問で、余裕があるのならば、増やしたほうがいい。

事務局案の中で、3ページ、行政の役割について出して欲しいとのことだった。対応方針のところ「そもそも現状の何が問題か」も、探っていかなければいけない。しかし、そうすると、協議会の人に何が足りないのか、もう一度ヒアリングをしてみるなどの方法

が浮かぶ。それだけではなく、今回、コミュニティに対する行政の関わり方も検討しなければいけないとすると、果たして誰に聞けばいいのだろうか。

また、コミュニティ構想に基づいて、ということが中間報告に触れられていた。コミュニティ構想そのものがもう40年近く前からあって、今こんな状況になってしまっていることを考えると、今の協議会の問題ではなく、構想を実現するためのプロセスをどこかで間違えていたのではないか。あるいは、合っているが、ボタンの掛け違いがあったのではないか。そこがきちんと整理されていないから、協議会の方々が、自分たちのやっていることをすべて否定されていると思ってしまうのではないか。

(高田委員長) コミュニティ構想は、今でも生きていると思う。

(井原委員) 死んでいるかどうかということではなく、あったのだが、ということだ。コミュニティ構想の文章が難しいが、今の武蔵野市のコミュニティのあり様を見てみると、理想と現実が違っているのではないだろうか。

側面支援に徹するべきだ、という話にしても、コミュニティ構想に対して、本当は行政がどのように側面支援するべきだったのか、私にはわからない。

(江上副委員長) コミセンを建てるのが、最大の側面支援だ。

(井原委員) だったら、それを議論した上で、やってあげれば、そもそも現状の何が問題かということも限られてくる。

(江上副委員長) コミュニティ構想の描いていた理想が何で、現実からずれているというのは、どうずれているのか。

(井原委員) 文章が難しくよく分からないと言ったが、私はかなり要約されているものを見ている。「コミュニティは市民自身が長期の自治活動の過程で作るものである」これがコミュニティだと言っているが、それがすでに分からない。自治活動の過程で作るものであると言われてしまうと、活動が先のコミュニティだと言い切っているのだろうか。3番の「コミュニティは市域全体の計画的な市政水準上昇の結果として生まれる」ということも、何を指しているのか、よく分からない。そこに「従って、特定地域の重点策をおこなない」、たとえば拠点的な児童館などはあまり作っていないという説明を受けたと思うが、そのことと計画的な市政水準上昇の結果と、どうつながっていくのかも分からない。

(高田委員長) コミュニティというものはできあがっているものではない、ということがそのポイントだ。プロセスだ。コミュニティづくりという終わりのない活動をしている、という感じだ。それがスパイラルで、いろいろな形でうまくいく時もあるし、逆に落

ちてしまうこともある。また、それは誰がどうするのかは、そこにいる人たちが自分たちで考えてやっていく、自分たちで何とかしていくということだ。その人たちが住みよいとか、井戸端会議で課題が出てきた場合は、そういうことにも取り組んでいく。それは全部中の人たちに任されている。その人たちが本当に実現できるような、自分たちの考えを実現していけるような形のところが、行政の側面支援ということだ。大きなものは集える場所があることだ。

(井原委員) まずコミュニティは続けていかなければいけない、協議会も続けていくことが大前提だと、何となく捉えられる。コミュニティをすべて協議会の人たちが背負い込もうとしているから、ガチガチになっているような気がする。協議会の中にコミュニティはあるかもしれないが、この中で触れられているコミュニティイコール協議会すべてとは、私は捉えていない。しかし、協議会の方々の話を聞いていると、自分たちがコミュニティを背負ってきたとか、自分たちがやらなければいけない、しかしなかなかうまくいかないから困っている、と言っているように聞こえる。すると、やはりこれを実現して、積み上げていくにあたって、何かはずれてしまったのではないかと思われる。

(高田委員長) 「開かれた」という言葉が、たしかあったはずだ。やっている時には常に開かれていることが大切で、自分たちでと思うこともあるかもしれないが、新しい循環も同時にやって、つないでいくとか。中心にやっていたが、その人が退いて、また新しい人が出てくるという形だ。人が変わってもコミュニティは続いていくということだが。

(井原委員) 人と人とのつながりが1本ではなく、いろいろな交わりがあるということか。それがおかしいのではなく、現状と合っていない。

また、「開かれた」ということも、閉鎖的、排他的ではないか。

(高田委員長) しかし、コミュニティセンターがなかった時に比べると、軽い知り合いが確実に増えている。コミセンに関わらなかった問題だが、それも目的別のような形でそういうつながりはある。そちらのほうで増えるかもしれないが、コミセンがあることでそういう人たちもいるわけだから、なかった時と比べると、人の動きは確実に出てきているのではないだろうか。

また、何か自分からやりたいと思った時に、それがやれる場にはなると。

(井原委員) たしかに、場や道具があることでできることは広がる。この間「コミセンがなくてもコミュニティはできるのだ」と言った人がいたが、その通りだ。もちろん、コミュニティセンターという箱ものありきという話ではない。

ただ、現実に今われわれが報告書で出す対象は、やはりコミュニティ協議会だ。

(井波委員) 資料1の最後に、これを1つのたたき台にしてという表現がある。30年経つわけだから、そろそろ他のことも、能力も落ちてきている、だから1回は見直してみよう。それにはネタが必要なので、たとえばこのような報告書について、みんなで議論して、当初の理想に近い形にみんなで持っていこうという話し合いにつながればいい。強制力はまったくない。

(井原委員) 研連や、あり方懇でも、そのような話し合いがなされている。コミュニティ協議会の活性化に向けた委員会ということだ。それは、ここに求められていることと違う。求められている諮問事項ではない。

(高田委員長) コミュニティの活性化だろう。

(井原委員) 諮問事項はそうだ。

(江上副委員長) もう1つ重要なのは、やはり一般市民の方に読んで欲しい。「うちの近くにも、そういえばコミセンというものがあつたけれど、ここに書かれているものと全然違う」と。コミセンに行って「何で違うのか？」と言う人が出てくるようならおもしろい。するとコミセンとしては、市民からそんなことを言われたと、いろいろ考え出し、議論が起きてくる。

コミュニティ構想のポイントの1つは、市民が自分たちで考えるということはずっと貫いてきたことだ。市民が自分たちで自分たちの地域を育てていくことを期待してきた。それは非常に能率が悪く、時間もお金もかかる。それにもかかわらず、うたわれている通りにはなっていない。

しかし、紆余曲折があつて、何か変わっていく。市民が自分たちの力で地域を見守り、育てていくことに限りなく信頼を寄せて、じっとそれを待つことが、コミュニティ構想のポイントだ。それは非常にまどろっこしいが、それをじっと待つ姿勢を捨てなかったから、少しずつよくなってきたのではないか。

(井原委員) まどろっこしくてもかまわないが、このような委員会が設定されているということは、何某かの道筋を、それは功利的な生き方にもつながるのかもしれないが、真っ直ぐ直線を引くということではなく、今違う方向に向いていることを整理して、「いや、間違いなくいい方向に進んでいる」という報告ぐらいは出してもいいと思う。

(江上副委員長) 今回の報告書を見ていただいて、自分たちはどうなっているのだろうかという議論が起きれば、大成功ではないか。そうしたある種の仕掛け、ネタとして今回の

報告書が読まれるといいのではないか。

(井原委員) 捉えられ方は、人それぞれの見方があるからいいが、われわれの考え方として、どうしていくかの意見がないと、最終報告の形にならない。

(江上副委員長) 「われわれ」という言い方をするところまで熟しているかどうかは別にして、かなりわれわれの考えが反映されているのではないか。

(高田委員長) 市民が自分たちで考えてきたということが、コミュニティ構想の根本だ。どこがやっているのではなく、行政は黒子的に支援するという事になっている。そういう枠組みの中で、市民がそれぞれやってきた、そういう形でやっていることがコミュニティ構想を継いだ形だ。

(井原委員) これもコミュニティ構想の1つの実現の形だと。

(高田委員長) 問題なのは、たとえば自主三原則をどうするかという時に、危なくなる。やはり続けようと、この間のヒアリングでも出た。そういう意見が出るということは、コミュニティ構想は生きているということだ。実際どのような形で続いていくかは分からないが、少なくとも、先ほど増田委員が言ったように、運営委員にならせないなどのやり方を取っているところも出てきているし、また東町や南町、けやきなどで、新しい試みをどんどん行っているところも出る。どこかのコミセンがおかしくなっているから、他のところから何とかしようと、市民の側から動くのはかまわないが、行政などに頼むのはどうか、という意見が出ている。そのこと自体がコミュニティ構想だ。

(西村委員) 私たちからすると、まさに試行錯誤で、お手本はない。今度の報告書の中にも、プラスの面を具体的に書き込むと役に立つのではないか。

(増田委員) 30年間によくも悪くも、それぞれ個性を持ったコミセンができてきて、コミセンのあり方は普遍的なものではないし、いろいろな個性を持ったコミセンが出てきたことは、よいことだ。3回のヒアリングに一度も参加しなかったコミセンがあって、そういうところを、少しでも驚かせられるような報告書にしたい。

(井波委員) 今までのいろいろな意見は、コラムという形にして、どこかに入れればいいが、基本的な問題は行政との関わりだ。特に、さらなる論点についてだ。これをどう扱うのか。極端に言えば、「行政の役割について」という11ページをこのまま残すのかどうか。残すとしたら、この中身を変えて、さらなる論点の中に「●」を加えてもいい気がする。

(高田委員長) 月並みな話だが、パートナーシップという話になる。30年前とは違った

様子になっている事態で、今の自主三原則をどのような形で確認するのかということだ。市民の自主三原則は生きているのだから、行政の三原則について考えると、かっこうがいいだろう。

もう1つは、衰退しつつあるコミセンがある場合、そこがまちづくりNPOに取って代わられるのか、という問題がある。地域コミュニティを考えた場合、そういうところをどう対処するのか。創設期の人たちは、そういう時は自主なのだからもう閉じてしまい、元気のいい人が出てきたらまた開くという形にするのが、最初の考え方だった。

(橘委員) 私は継続性が非常に大事だと思っている。基本的には、市民自治、建て前でコミュニティ自主三原則がコミュニティ構想として立ち上がり、営々と30何年やってきた。少しはくたびれてきている部分が当然ある。しかし、大きなトラブルを起こさないで再生してきた。非常に活発なところとそうでないところがあるのは当然で、すべてが活発ということはありませんので、しょうがない。

行政側の三原則を言うなら、金を出すけれど口は出さないということを、市がかたくなに守ってきたことが、今の武蔵野のコミュニティの最大の特徴だ。これはぜひ継続していかなければいけない。これが基本的には民主主義の根幹をなすものではないか。

(高田委員長) 皆さんに宿題を出したらどうか。それを受けて、もう一度考えれば、話が効率的に進むのではないか。

行政とコミュニティ協議会との関わりがある。行政が積極的な役割を果たすことについて、皆さんはどう考えるかということだ。

その中に含まれるかもしれないが、行政が積極的な役割を果たすということに関して、どう考えるのか。

(事務局・森安) ここまで回を進めてきて、どうしても言っておきたいことがあったら、たたき台が出る前の段階でも、事務局に文章を、お寄せいただくと助かる。

もう1つ、いい話のエピソードは、こちらでは出せないのだから、皆さんから、出していきたい。

スケジュールについてだが、当初から年内には最終報告を出したいと考えている。次回の11月の委員会の前までには、たたき台を示し、それを踏まえて、12月に、2回委員会を開催し、できれば、12月中までにはまとめてしまいたい。

(高田委員長) 今の行政とコミュニティとの関わりについてが1つ、それから、この中

に入れたほうがいいと思うこと、あとはいい話のエピソードを寄せてほしい。

《11月日程》

- ・ 11月17日（火） 午後6:30～ 総合体育館3階視聴覚室

《12月日程》

- ・ 12月3日（木）
- ・ 12月21日（月）

〔了〕

第六期武蔵野市コミュニティ市民委員会

第16回委員会

議事概要

日 時：平成21年11月17日（火）18:30～

場 所：総合体育館 視聴覚室

出席委員：高田委員、江上委員、小木委員、橘委員、島森委員、渡邊委員、井原委員、
和久田委員、島田委員、井波委員、増田委員、清本委員、西村委員

1. 議事 最終報告（案）について

・コンサルタントより資料説明

（高田委員長） 全体の構成について、また追加した部分について意見をいただきたい。

（橘委員） 5ページのコミュニティの問題が何かという部分だが、問題はたくさんある。コミュニティづくりの原点に立ち返っていない活動、原点から外れたことをやっているために、問題を見失っている部分があったのではないか。原点に返れ、ともう少し強調するといいいのではないか。

（高田委員長） 「原点に立ち返って」という表現は別のところにもあるが「今、何が問題なのか」に、「原点に立ち返って」という文言を入れるということか。

（橘委員） 次の7ページの、義務的になっている部分も、コミュニティの原点に照らし合わせてどうなのかの検証があるといい。そこから外れている活動は行わなければいいのに、受けてしまい、それが実績になっている部分があるのではないか。すると、仕事だけがどんどん増えていく。原点に戻って活動を整理する、業務仕分けを行うとよいのではないだろうか。

（高田委員長） 7ページの3のあたりに「原点に立ち返って」という言葉を入れるのか。

（井波委員） 5ページ目の上の2行の「今、何が問題なのかを、原点に立ち返って考えたい」と、最初に入れてはどうだろう。

（事務局・森安） まとめるところに、書いてはどうか。ここで書いているのは、行政の関与も原点に立ち返ろうということだ。また、自主三原則もしっかりやっ払いこうと書いているので、まとめの中に「本来あるべき原点に立ち返るという姿勢が、今、重要になってきているのではないか」というような切り口をどこかに入れるとよいのではないか。

(高田委員長) 「原点に立ち返って」というキーワードを、井波委員の意見と、森安課長補佐の意見の両方のところに入れてもいい。22 ページと 5 ページのあたりに「原点に立ち返って」という言葉を、何とか入れ込むように。

ところで、エピソードが載っているが、名前の扱いはこれでよいのか。

(事務局・森安) 橘委員は研連としての発言として、行政のあり方がどうなのかという内容だったので、あえて入れているが、それ以外のところは特に名前を入れなくてもいいと考えている。

委員会の参加委員からエピソードを出していただいたため、委員が所属しているコミセンのものしか載せていない。たとえばコミセン名も取ってしまったほうがいいのかどうか。

(高田委員長) 私は、どこのコミセンのエピソードなのか出していいと思っている。

(小木委員) 全部載せると数が多くなりすぎるし、出ているところだけでもいいのではないか。

(高田委員長) これは委員会で出しているのだから、委員の人の意見でいいのではないか。

(渡邊委員) このスタイルでいいと思うが、自由意見の一例や囲み記事の中で、取捨選択を含めて、ちょうどいいところにちょうどいいものを当てはめていく、その記述を忠実に受けて、やっていった方がいいのではないか。そういった意味では、もう1つ2つ、エピソードを増やしたほうがいい。最後のエピソードは、行政とコミュニティ協議会との関わりではなく、やはり自主三原則という原点に立って、という表題にして、固有名詞は取ったほうがいい。

(事務局・森安) ここはエピソードではないということで、橘委員からいただいた。よって、エピソードというタイトルを付けるのは間違いだろう。

(橘委員) コミュニティを実践している現場の人間としての考え方だ。

(渡邊委員) 中身はいいが、全体のエピソードの中の位置付けと、全体の報告の中の位置付けとしては、多少の配慮が必要なのではないか。

(井波委員) エピソードにコミセンの名前があると、他のコミセンからのエピソードはないのかという議論になるので、それを除けばいいのではないか。話の中にどこのコミセンか分かるように書いたらどうだろう。また、エピソードを増やしてもかまわないが、16 コミセン全部を出す必要はまったくないと思う。

橘委員の話は、エピソードではないし、これに対する全体のご意見だから、別のものか

もしれないが、私は入っていてもいいと思う。

(高田委員長) 左のページの行政の役割と、橋委員の意見がちょうど呼応しているから、エピソードではなく、何らかの形にして入れたい。

(西村委員) 12ページの「コミュニティの活性化に向けて」に、コミュニティ協議会の役割・機能について、コミュニティセンターとコミュニティを2つ分けて書いてあるが、あまり際だっていない。コミュニティにおけるコミュニティ協議会の役割・機能、あるいはコミュニティ活動促進のためにコミュニティで協議会が果たすべき役割・機能が、分かりにくい。

(高田委員長) 12ページのところだと、コミュニティ協議会のコミュニティにおける役割ということだろう。

(西村委員) 15ページからはコミュニティ協議会のコミュニティセンターにおける役割として、2つに分けて書いてあるが、コミュニティセンターの管理・運営におけるコミュニティ協議会の役割・機能のほうは分かるが、コミュニティが分かりにくい。特にコミュニティの2番、14ページだ。「コミュニティ活動の促進のために、コミュニティで果たすべき役割・機能」は、コミュニティセンターにおけるものとどう違うのだろうか。もう少し書き込んでいいのではないか。たとえば②具体的な取り組みのところは、コミュニティ研究連絡会のことか。

(高田委員長) 下から3行目。私もここは括弧を入れて、コミュニティ研究連絡会と書き込んだほうがいいと思う。

(西村委員) 括弧ではなく、コミュニティ研究連絡会は一定の役割を果たしてきたし、これからも果たしていくだろう。コミュニティ研究連絡会に、正面から触れておいたほうがいいのではないか。

(高田委員長) 「研究・連絡・協議」と書いてあるが、「コミュニティ研究連絡会という場を設けている」とするか。

(西村委員) また、活動内容を、市民に知られていないとしたら、その解説も入れている。コミ研連のネットワーク補助金事業については、そのおかげで、今年もいろいろコミセン間のネットワーク事業ができたということも、書き込んでいいのではないか。

そのことに触れて、果たすべき役割・機能のところ、たとえばこういった活動が期待されるというような、もう1つ先に進むような書き方もあるのではないか。現状について、どこか別のところで書いてもいいが、ここでも「お互いの工夫やノウハウを今まで以上に

活発に、様々な形態で情報交換することが望まれる」と書いてある。この書き方でいいが、コミュニティ研究連絡会、ネットワーク事業について、もう少ししっかり触れて欲しい。コミュニティセンターの管理・運営以外の役割、活性化に向けての活動など、もう少し入るとよいのではないか。

(高田委員長) 入れるとしたら、現状のところか。

(事務局・森安) ここもたとえばエピソードとして、たとえばネットワーク事業でどんど焼きをしているなど、具体的な例を挙げて載せれば、研連を中心としたコミセンのネットワーク事業を理解してもらえるのではないか。

(江上副委員長) あり方懇も入れよう。

(清本委員) 西村さんの意見に関連してだが、「コミュニティ協議会同士は」という書き方だと、コミ研連を知らない人には、分かりにくい。

(高田委員長) コミ研連自体の解説が必要だ。

(清本委員) コミュニティ協議会の他に、最近はNPOなど地域のいろいろな団体があり、そこの関わりもあるということも書いてもらえるとよい。

(高田委員長) 14 ページの、「団体同士」の部分に、防災や福祉などもっと具体的に書くということか。

(橘委員) 地域の諸団体は、狭い意味で1つの目的を持っている。コミセンの場合は違うので、同一には扱えないが、そのような地域のいろいろな諸団体との連携は現実にやっていることについて、ここにもう少し入れたらいい。

もう1つは、先ほど話が出た研連の役割と、研連がやってきているあり方懇談会などにも触れたらどうだろう。今までの文章の中には、研連という言葉がまったくない。

(高田委員長) これは、わざわざ外したのか。

(事務局・森安) 中間報告の時に、コミュニティ研究連絡会と書いて、下に囲みでそれを簡単に紹介する文章を載せようと思ったが、そうすると、他にいろいろな言葉を出ところも全部説明しなければならず、説明が多い文章になってしまうので、あえてここは「コミュニティ協議会同士は、現在も月に1回、定例で研究・連絡・協議の場を設けています」とした。

(西村委員) エピソードとして説明するのは、ネットワーク事業だ。コミ研連そのものは、本文にきちんと入れておいたほうがいい。

もう1つ言いたかったのは、今のページ(14ページ)の上のほうで、NPOや地域福祉

に、特別に厚い支援をしているコミセンがあると思う。コミュニティ協議会が、活動をおこなうその地域の団体に支援していることを、場合によっては具体的に実例を出してもいいのではないかと。そのようなことができるということを、市民に伝えたい。

(高田委員長) コミュニティ協議会がコミュニティ活動促進のために果たす役割だ。センターで果たす役割ではなく、コミュニティで果たす役割だから、ここに入るわけだ。

(西村委員) コミュニティで果たす役割について、コミュニティセンターの他に書き込んでいただきたい。

(高田委員長) 「もうやっているではないか」ということにならないか。

(西村委員) やっているところはわずかで、やっていないところに対するPRだ。

(清本委員) 7ページについて、何が問題か、というところだが、コミュニティ協議会の活動の中の、「自発的におこないたいと思う業務以外をやらされている、やりたくない業務までやらされているという側面があるのではないかと」という書き方は、どうか。

協議会の人たちは、ある程度管理・運営にも関わらなければいけないので、やりたいことだけをやっているわけではない。利用する人たちの話なのか、そうではないのかがよく分からない。つまり、コミセンの活動の中に、誰かから押しつけられてやる活動があるということか。

(高田委員長) それは外から見てなかなか運営委員になりたがらない、入っていけない理由として、そのような思いこみがあるのではないかとということだろう。最初に何かをやる時には、みんなこのように言う。

(井波委員) 構成については特に異論はない。7ページの上から3行目の「大きな問題の一つは」から「問題意識がある」までの3行が気になる。現場側から見て、このような書き方はいかななものか。これは現場の人に聞くべきだ。

(高田委員長) これは江上副委員長が、以前ボランティアについてきちんと論じなければいけないと言っていたことにも関わる問題だ。

(井波委員) 先ほどから「原点に立ち返って」という言葉が出ている。最後のまとめ、人と人をつなぐ、団体と団体をつなぐことが、このコミュニティ協議会の大きなミッションだとすれば、もう一度活動を見直す中に、果たしてその活動が本来のものに沿っているのかどうか、沿っていないものまで背負わされるのはかなわないということなら、意味が分かる。

(橘委員) 単純に受け止めると、コミセンサイドの自主三原則でやったこと以外、たと

えば行政からの押しつけだと取られがちだが、実際には、そういったことはあまりない。そうではなく、実態を言うと、たとえば文化祭を始めてから30年経って、30回やっている。文化祭の準備は、みんなでやらなければならないが、いかにボランティアだと言っても、賛成しないからやらないという自由はない。そのことが外部から見た場合に誤解を生むことがあるのではないか。

(島森委員) 中には、一部の行事について、あまりやりたがらない人がいるかもしれないが、たとえば行事を何のためにやるか、その時にどうしたいのか話し合いがもう少し必要なのではないか。それが原点に返って、ということだ。それにはいろいろな意味があり、結論にまで通じてくる。

(高田委員長) 今の、ここの表現はどうだろう。

(井波委員) 本当に内部的に、義務的な性質をおびているととらえられているのかという疑問だ。

(島森委員) 何かをやるにしても、終わったあとは、みんな満足感、充実感に変わっているの、やる前とやったあとでは全然違う。

(清本委員) 実際にやると楽しかった、よかったとなるが、やりたくない業務までやらされていると表現するのは、どうだろう。外から見たらそのように見えるかもしれないということか。

(和久田委員) 運営委員や協力員になる場合、自分で手を挙げてなっているの、やらされているという表現は、当てはまらないのではないか。

(高田委員長) 上から6行目のあたり、コミュニティ協議会の中からそういった声も聞こえてくる、こういった背景には、と具体的に括弧で文章を入れている。ここの表現はどうだろう。

(和久田委員) そういった部分もあるかもしれないが、やりたくない業務までやらされているという感覚ではないのではないか。そのあとの達成感、やりがいに繋がり、それが満足感になっていく。

(清本委員) 最初はやりたくないと思っても、一緒にやることでつながりができて、輪ができていく、ということまで書いてあればいいのだが、ここまでだけだと、どうなのだろう。

(高田委員長) しかし、これは次の自発的におこなわれるべきものに繋がる。

(増田委員) 最初にこう書いてあるのが問題なのではないか。運営委員や役員の担い手

がないという問題があるわけではなく、これが理由でなかなか担い手が生まれてこない問題があるということだ。

(高田委員長) 「性質をおびている誤解があるのではないか」ということか。

(西村委員) 16のコミセンがあれば、このような声は少なからずあるだろう。窓口として入って運営委員になった人の場合、窓口の仕事が主だという意識があって、運営委員の仕事はやりたくないけれどやらざるを得ないと考えている人が半分ぐらいいる。なりたくない理由の1つとして、やらなければならなくなるということはあるだろう。それは問題だが、それをどう書くかだ。

(井波委員) 何が問題かだが、義務的にやっているという表現よりも、本来人と人をつなぐ活動になっているかどうかが大変だ。たとえば「活動がマンネリ化しており、いくぶん義務的なものになっていないか」などの表現だとうまく繋がるのではないだろうか。

義務があっても当然だが、コミュニティ協議会としてやらなくてはいけない理由を十分に納得していない人が、やりたくないと言うのかもしれない。

(高田委員長) ミッションに沿った活動かどうかだ。

(江上副委員長) このように見られていると、コミュニティ協議会の方々に自覚して欲しい。

自覚して欲しいことは2つある。1つは、30年間で、ある種の型のようなものができていて、それに合わせてもらわないと困るという雰囲気になっているのではないか。誰でも参加できるといいながら、その型に合う人しか受け入れなくなっているのではないか、ということだ。

それと関連して、2つ目は、確かに館の管理など義務的な仕事もある。しかし、それが必要な理由や、窓口がこのようにやらなければいけない理由をみんなで議論して、みんなが納得できずでやっているかどうかだ。その2つのことを問題点としてぜひ指摘して欲しい。

(高田委員長) 外から今のコミセンを見た場合に基づいて考えているので、このような理由で運営委員になりたがらない人がいることを、考え直すために書かれている。運営委員の立場としては、これから活性化しようとしているのに、トーンダウンするようなことを報告書に書かれると困ると思われるだろう。

(井原委員) これでいいと思うが、エキセントリックな表現は、柔らかくしたほうがいい。コミュニティ協議会の活動の中に、コミュニティ活動の例がいろいろ載っているが、それを指しているのではないか。それが自発的に行いたい「業務」という言葉に急に変わ

っているのが、気になっている。業務だと仕事のような。

P T Aの中で、何のためにやっているかがみんなに浸透していない場合や、やりたいことをやっていない場合があるため、やっていない人に対して「やっていないのは不公平だ」と言う。それは義務を通り越して負担でしかない。そうではなく、つらいのを承知でやりたいことをやるという部分が抜け落ちているため、単に業務に落ちてしまったのではないか。やる以上は義務があるのは当然だが、それは業務の話で、活動の部分に関しては義務という言葉が出てきてはいけないのではないか。

だから、この3行より、その下の「コミュニティ協議会の中からは云々」「義務的な性質をおびているととらえられている」の部分が重要だと考えている。

(高田委員長) 業務を活動に変えて、下の部分は生かすと、江上副委員長が問題提起しようとしたところも伝わるということだ。

(井波委員) 「やりたくない」という言葉ではなく、たとえば「納得できない」「納得できない活動」にして、「納得できない活動までやらされている側面があるのではないか」としたら、比較的穏やかになるのではないか。

(橘委員) 現在の運営委員は、入ってきた動機が2通りに分かれる。1つは純粋に自主参加で入った人、もう1つは窓口だけが目的で入った人だ。意識的にまったく違い、昔から窓口をやっている人は、他のコミセンの一般的な活動や行事を一緒にやって欲しいという、「やりたくない」という意識が働いているだろう。このような人がいなくなる限り、この問題は消えないし、自主参加で入ってきた人だけになったとしても、この問題は残るだろう。

(高田委員長) 最初の3行は、井波委員の提案のように変更して、あとのほうはそのままにしてはどうだろう。江上副委員長が問題提起された、30年間で型のようなものができているのではないかということに関する批判は、どこかにあるだろうか。それに対する問題提起はここにあるだろうか。

(江上副委員長) 今のところにそういったニュアンスを含ませて欲しい。

(橘委員) 思考パターンや、考え方がそうになっていて、コミセンごとに異なる。

(西村委員) 現在開催しているイベントを中止するのは、とても難しいので、やり方を変えることで活性化するしかない。

(高田委員長) 細かいところはあとにして、修正はここまでにする。

これで、分かりやすくなったと思うが、たとえば「コミュニティの活性化に向けて」に、

活性化の主体としてコミュニティ協議会が出てくる。次に行政、3番目にコミュニティセンターの移転・新築・改修、が出てくるのは、おかしくないか。ここに行政の役割を出すなら、次は市民の役割が出てくるのではないか。コミュニティ協議会が市民を代表していることでいいと思うが、コミュニティを活性化する主体は、協議会と行政だけだろうか。あるとすれば、目的別団体、NPO、福祉、防災などの活動団体だろうが、そこまで入れるかどうかだ。

(島森委員) 20ページの①②③に、防災の拠点としての機能とあるが、これは小中学校、他の防災拠点というところに入るのか。

(橘委員) 移転・新築・改修の中では、今後こう考えていくということだろう。

(島森委員) 拠点として、改修の中に、このような防災の機能を持たせるという意味で、ここにあるということだ。

(高田委員長) コミュニティセンターが、老朽化していて、それを何とかする時に、この視点も入れたらどうかということだ。コミュニティセンターは防災の拠点ではないということに関しては合意している。何をに入れるのか、いろいろな設備を入れるのか。

(事務局・森安) たとえば防災の拠点は、今のところ一時避難場所として、小中学校とされている。しかし、長時間避難して、たとえば病院に入るまでではなくても重篤な方がいて、しっかりセパレートされた場所が必要な時に、コミセンの畳の部屋が使える、というような意味だ。

(事務局・盛田) 改修の時、どのようなものが使えるのかを検討することになるだろう。

(井原委員) 改修に入れなくてもいいのではないか。現段階でもできることがあるはずだ。機能と言うよりも、役割の部分だ。正確には災害が起きたあと、コミセンはお湯が出るし、調理室も畳の部屋もあるので、防災としての役割が持てないかということだ。

(高田委員長) 役割という形か。ハード面のことだ。

(事務局・盛田) 今の形だと、コミュニティセンターの役割として、という部分に入るのではないか。

(事務局・森安) 建物の役割として、という意味では、改修の中に入っているのがおかしい。この部分はハードのことを述べているので、(1)(2)(3)のあとに、(4)として、こういった役割が期待されているとしたほうが、より分かりやすいかもしれない。

(高田委員長) 正確に言えば、番外になるかもしれない。目的団体に入るだろうか。この3番目だ。つまりこれはコミュニティの活性化だから、その担い手として、ネットワー

ク形成などの部分に入るのはないか。

(江上副委員長) ネットワーク形成は、コミュニティ協議会のところに、すでに出ている。

(西村委員) コミュニティ協議会とは関わりなく、地域の諸団体と、ということか。

(高田委員長) 項目として、協議会が担い手なのは確かなので、1ページに書いてあるように、武蔵野市のコミュニティは、コミュニティ協議会の活動であるということが、特に全般的な話だ。それと、コミュニティづくりの機関としての協議会ということが出てくるが、コミュニティづくりは、協議会も、NPOもやっている。形式的に言えば、3番目はセンターの移転・新築・改修ではなく、その主体を出すべきではないだろうか。

(江上副委員長) 論点は2つある。1つはコミュニティ協議会以外の主体の役割を書き込むかどうか、もう1つはコミュニティセンターの移転・新築・改修をここに置くかどうかだ。後者については、私はここでもいいと思う。つまり、コミュニティセンターの移転・新築・改修も物理的な条件、施設的な条件を整えることでコミュニティの活性化に結びつけようという話なので、それほど的外れではない。

もう1つの、他の主体については、膨大な話になる。たとえばNPOでは、数年前にNPO支援計画があって、そこでは、武蔵野市はコミュニティ行政をずっと続けてきた土台があるが、それとどうマッチさせていくかが重要だと書いてある。その点でも、コミュニティ協議会がコーディネーター役を果たすべきだということがかみ合っている。ただ、NPOという言葉があまり出てこない。14ページの「地域で活動する団体同士」で、NPOなど具体像が分かるように具体的に書いて、必要に応じて地域の活動団体に声をかけながら縁結びをする役割を、コミュニティ協議会が負ってもいいのではないか。

(高田委員長) 以前、NPOについてのまとめがあったが、コミュニティ協議会などとの関連はどうなっていたのだろう。

(事務局・森安) それは、促進協議計画のことだ。自主三原則の紹介がされていて、NPOの活動に三原則が出てくる。

(高田委員長) 今言ったように、これをやるのは、非常に大変だ。最初の3ページを見ると、3番目は違和感があるが、内容を読むと、違和感がなくなる。

主体のところは14ページに入れ込んで、関連のところを豊富化して、これはこれでいいのではないだろうか。3番目を付けると、あと2回では終わらなくなる可能性があるので、このままの形にしてはどうか。

(渡邊委員) これから原点に立ち返った、自主三原則が試されるところだ。

(渡邊委員) 細かいことで、7ページの本文の5行目で「というのが本報告における問題意識である」と大上段に構えているのは、どうだろう。本報告における問題意識とすると、全体に関わる印象を受ける。「というのが問題意識にある」とすればいいのではないか。

(高田委員長) 「業務」を「活動」に直したほうがいいという意見もあった。「やりたくない」というところは「納得できない」として「というのが、ここで検討されるべき課題である」とする。

他に大きなところはないだろうか。たとえば、前文のような形で「はじめに」が必要ではないか。また、まとめは、このまとめでよいか。あるいは、まとめを最初に、本報告の方向付けとしてトップに出すか。

(事務局・盛田) この委員会として、言いたいことがはっきり分かるようなものが、「はじめに」か「まとめ」のどちらか1つがあるといい。

さらに、議論のまとめとなっているが、それでいいのか、それとも報告書としてのまとめとすればいいのか、などもあるのではないか。

(事務局・森安) タイトルを「議論のまとめ」とするのか、ただ「まとめ」でいいのか。

(高田委員長) 「議論のまとめ」でいいのではないか。この図は、まとめの図で、これを見れば、この報告書が分かる。

(江上副委員長) 「はじめに」と「まとめ」の両方あってもいいのではないか。

提案だが、「はじめに」に相当する部分を加える。内容は、1ページに、本報告の位置付けで○が4つ書いてあることをまとめるような形で、諮問された内容、議論した内容、だいたいこういう結果になったということを、委員長に文章で記述していただいて、それを最初に入れる。「はじめに」や、「本報告の位置付け」ではなく、間を取って適切なタイトルにして、委員長にそれを書いていただきたい。そして、ぜひそこに、この報告をもとに、各協議会で議論して欲しいと書き加えていただきたい。

(高田委員長) では「はじめに」を入れよう。1ページで「武蔵野市のコミュニティ施策の根幹は、コミュニティ協議会の活動である」と断言している。だからコミュニティ協議会をやる。

(井原委員) 1ページの一番下の○に「施策の根幹は協議会の活動である」とあるが、これだけでは足りないのではないか。根幹は自主三原則に基づいたコミュニティ協議会の活動というように、そこに自主三原則を入れなくてもいいのか。

(高田委員長) コミュニティ施策というのは、コミュニティ構想だ。コミュニティ構想の根幹から引き出されるものとして出てくるのが、コミュニティ協議会だ。そのコミュニティ協議会の行動様式は自主三原則で保障されているという形だ。こう明確に書くように、ということか。

もう1つ、ここに出てくる行政について、「行政は側面支援に徹すべきである」と確認しておかなくてはならない。側面支援は、下のほうにあるので、これはコミュニティづくりの側面支援に徹すべきであると入れたほうが分かりやすい。ここにもう少し加えて、行政のコミュニティ支援の三原則を入れようと思っていたが。

(島田委員) これは質問だが、行政はコミュニティ協議会に対して、期待していることはないのか。個人的な意見だが、たとえば、市報を全戸配布しているが、コミュニティ協議会に声をかけてみてもよいのではないか。

また、いろいろリサイクルをやっているが、資源回収もコミュニティ協議会を中心にしてみようと考えないのか。声をかけて、断られる場合は別だが、ただ補助金を出すだけではなく、そういった仕事もある程度担ってもらい、それがコミュニティにも入るという形にしたら、どうだろう。

(高田委員長) 期待していることは、私も聞きたい。コミセンで全戸配布やリサイクルは、やっていないのか。

(島田委員) 市報はシルバーがやっている。

(高田委員長) コミセンだよりや、ニュースはみんなコミセンが配布している。

(島田委員) コミセンでも全戸配布できるはずなのに、どうして使わないのか。

(橘委員) コミセンが市報を配るのは、行政の下請けになってしまうので、できない。さらに、それを受けるには、大変なコストがかかり、それこそやりたくない仕事をやらされることになりかねない。

(島田委員) 市報を配る人は必要だ。コミュニティにも配布能力があるのに、なぜ今はシルバーにお願いしているのだろう。コミュニティをつなぐ1つの材料になりやすいという思いがある。

(増田委員) シルバーの人たちは、仕事としてやっている。

(島田委員) それはいろいろな考え方があろう。コミュニティ協議会にそのような仕事を下ろしてはいけないのだろうか。補助金をどう使うかという話とは別だが、そうするとコミュニティ協議会にお金が入るかもしれない。そのような発想は、どうだろう。

(高田委員長) そのようなコミセンがあってもいいということか。

(江上副委員長) うちの地域は責任を持ってここからここまで全部配るから、その代わりに1部100円欲しいというようなところが出てきたらおもしろいだろう。それは下請けではなく、ちゃんと委託契約を結び、商売としてやる。

(井原委員) 委託、下請けということではなく、行政がまずコミュニティそのものに期待しているものというのはあるだろう。それを知りたいので、行政でいろいろな課から採ったというアンケートを、先日拝見させてもらった。しかし、回答にはコミュニティや、協議会に対する期待ではなく、コミュニティセンターの利用方法という箱のことばかり書いてあった。コミュニティに対して触れられていたのは、防災課の部分だけで、それが気になった。もちろん、箱ものとしてどう利用するかは、行政として大事な発想だろうが、いろいろな委員会で「コミュニティ」という言葉を使うのであれば、行政がコミュニティに何を期待しているのか、もう少し掘り下げていただけるとうれしい。

(高田委員長) このままだと、行政はコミュニティづくりの側面支援に徹するべきだと出てしまうが、それでいいのか。行政が、こういうところも含めてやってもらいたいと期待しているところは、私も聞きたい。

(事務局・盛田) まず、直接言えない理由は、やはり自主三原則があり、下請け的なものをお願いできないという自主規制が各課にある。一方でコミセンが各地域に敷設されているので、その中で市からの情報などを置いてもらって、配布することになっているのだろう。

コミュニティに何を期待するのかは、まさにここが、議論していただく場だと思っている。実際には各課でアンケートを採っても、期待されているものを統一的に出すには、時間がないだろう。

(高田委員長) 私のベースはパートナーシップなので、対等な形で議論し合っていきたい。

(事務局・森安) 行政がコミュニティに期待していることは、「地域の活力を高めるためのコミュニティのあり方」と、抽象的な言い方をしているが、諮問をしている項目の中に現れている。

アンケートの中に出てきた、「人と人とのつながりが求められているが、出会いの場、交流の場がない」ということが現実であって、これを何とかするためのコミュニティのあり方、活性化をして欲しいということが、コミュニティ協議会や、コミュニティ、コミセン

に求められていることだ。期待していることを端的に言うと、コミュニティ協議会にはコミュニティづくりをしていただきたい。島田委員が言ったようなことは、コミ研連の場で各課が来て、いつもお願いしていて、できるところはやっていただいている。

(高田委員長) いろいろなお願い、市の行事についてコミセンへの参加のお願いはされている。それはそういった形のコミセンのことであって、行政がどのようにコミュニティづくりをしようと思っているのかは、話をしていないので、そこを聞きたい。

(事務局・盛田) 基本的に市が要望しているところは、今、森安課長補佐が言ったように、コミュニティづくりをやっていただくことだ。同時に委員長のほうから再三あるように、協働の時代に、行政とコミュニティ協議会との役割分担をどうするのかは、1つの課題だろう。しかし、ここではそういった議論になっていないので、皆さんの結論として、これでいいのではないか。ただ新しい課題の1つだろう。

(島田委員) もう1点、11ページに「また、コミュニティ活動を活発におこなっているコミュニティ協議会とそうでないコミュニティ協議会との間に、取り組みの差が生まれている」とあるが、具体的に分からない。これは必要なのか。

だから、どうするのか。自分のコミセンのことを言われていると思う人がいるだろうか。

(井波委員) これはコミュニティセンターのところに入っているのに、違和感を覚える。かなり大事なことがさらりと書かれている。結局、コミュニティ活動を活発におこなっている、おこなっていないの判断は、外から見ると、例のいろいろな行事になる。原点に戻ってということだが、人と人とをつなぐ、あるいは団体と団体をつなぐようなコミュニティ活動を、回数が少なくても実質的にやっているところと、単に人集めだけやっているところがあるとすれば、この引用だけで簡単にすませるのは、ちょっと問題があるのではないか。

コミュニティ活動というより、本質はコミュニティづくりだ。活動をいくらやっても、コミュニティづくりに貢献していないのでは、というニュアンスを含めるならば、コミュニティづくりを活発にやっているところと、やっていないところがあるのではないか、という表現になるのではないか。ただ、これが11ページの頭のところに続いて入るのが妥当なのかは疑問がある。

(高田委員長) 「貸し館になってしまい云々」というところだろう。

(井波委員) これはコミュニティセンターの現状と課題のところだ。

(高田委員長) これは現状と課題だから、それを受けて、人と人とをつなぐ活動をしよ

うというのが活性化に向けて繋がる。

(井波委員) ここでは、活発におこなっているコミュニティ協議会、となっている。

(小木委員) センターの現状と課題ではないのではないか。

(井波委員) 入れるのなら、どこか他のところに入れるべきだ。

(小木委員) 前のページにコミュニティ活動に関する現状と課題というところがあるが、この文章に今のこの2行は入れ込みにくい。

(島田委員) 私が提起した問題は、本当にこういう文章が必要かどうか、理解してもらえるかどうかだ。理解してもらうためには、コミュニティセンターにおけるコミュニティ協議会の、活動方法の評価基準が決まっていけない。

(高田委員長) コミュニティの館の管理に留まっていて、コミュニティづくりにはそれほど熱心でないコミセンがある。館の管理ではなく、コミュニティづくりをしようというのが、コミュニティ市民委員会の第3回辺りの議論だったので、それを超えなくてはいけないのだが、超えられないでいるコミセンがあるということだ。

(島田委員) うがった言い方だが、それを地域の自主三原則でやっているというのなら、その地域としてはいいのではないかと。

(高田委員長) その地域の方々がそれでよしとしていたら、そのような地域になっていくということだ。しかし、相互に見る機会があるので、そこで他のところと比較して、自分たちの状況が正しいのか疑問になる。そういった意味で、コミ研連、あり方懇が機能してくれるはずだ。

(井波委員) すると、たとえば貸し館になってしまっていることによって、協議会で違いが出ているのではないか、という意味なら理解できる。

前の文章が続くのだったら、「そのために」「それによって」そういった違いが出ていると書くといいのではないか。

(高田委員長) 「その結果」と。

(和久田委員) 最近、貸し館だけではなく、みんなが競争し合っているような雰囲気があり、変わってきている気がするが、どうだろう。

(橘委員) よく研連などでも問題になるが、客観的にはお金の使い方面で端的に表れる。次年度に50%以上繰越金が残るのは、事業らしい事業をしないから、悪く言えば貸し館だけやっているから、お金が残ったという見方をされる。

(島田委員) 逆に、コストをかけないでできるのは、素晴らしいと思うが。

(橋委員) もちろん、ただ金をかければいいというものでもない。来館者数などを総合的に見ると、不活発だと認定されるところも出てくる。本当に効率的な金の使い方をしていくかどうかは、また別の問題だが。

(井原委員) コミュニティ活動を活発にというのは、回数だけの話ではないのではない。

(橋委員) 端的に言えば、そういった見方をされる。

これは過去の話だが、繰越金が非常に多く残っている理由を、いろいろ調べたら、内部的に人間関係がうまくいっていなかった。一番の基本である、コミセンの中のコミュニティとなる内部の人間関係がうまくいかないのは、大変な問題だ。従って、ろくな活動もできないことが、現実にあった。コミュニティのために本当に効果的な行事を行って、その結果節約して、繰越金がたくさん残るのが理想的だが、なかなかそうは行かない。何か問題があるから、繰越金などの面に出てくると、私は見ている。

(島森委員) 現実には、地域を活性化させようと思うと、いろいろやりたいことが出てきて、当然お金もかかって、使ってしまう。お金の面だけではないが、橋委員の話のように、そういった形で出てくることはある。

(高田委員長) ここは、問題提起をされたと言うことで、もう少し考えることにしよう。

(江上副委員長) 今の話の中で、確かに問題のあるところがあるが、それは市民同士の努力で解決していくというのが委員長の意見だった。それを、ぜひ18ページに書いて欲しい。行政がより積極的な役割、つまり介入してもよいという意見があったが、そこまでは関わらないで、側面的な支援にしようということになった。すると、コミュニティ協議会、コミュニティ活動、コミセンをめぐる問題が生じた時には、5行目から6行目に「コミュニティ協議会の活動や運営については、あくまでコミュニティ協議会の中で改善を図っていくべき」と書いてある。これだと、1つのコミュニティ協議会で解決しなければいけないと受け止められるが、そうではなく、研連や、あり方懇などの、市民同士が努力することで、さまざまな問題を解決していくという方向性を、ぜひ書いて欲しい。

(高田委員長) それはNPOなども含まれるのか。

(江上副委員長) もちろんそうだ。広い意味での市民同士ということだ。

もう1つは、18ページの冒頭の「コミュニティ協議会と行政との関係について」の文で、「支援する役割に徹してきた」となっているが、このような協働にかなり近い1つのやり方を、協働という言葉がなかった時代からやってきたと、実績を評価する意味で書いて欲しい。

(高田委員長) コミセンの運営を市民に任せるのは、非常に先端的なことだった。

(江上副委員長) もう1点、先ほどの行政がコミュニティに何を期待しているかについてだ。コミュニティが育つ中で、様々な話し合いや議論がおこなわれると、町の問題が明らかになり、その問題を解決する活動に取り組もうとする。その段階で、初めて行政と連携や、協働を行うことができるのではないかな。

それはすでに具体例があって、たとえば東町で交通問題についていろいろ議論をしているうちに、道路課の人に相談したり、警察の意見を聞いたりしているが、それがまさに協働だ。このように、コミュニティ活動がだんだん煮詰まって、課題が浮かびあがった時に、対等の立場での協働が初めて生まれてくる、といった段階までどうやって持っていくかが、今回のこの報告書の狙いではなかろうか。

(西村委員) 私も協働のところで、さらなる協働のようなことを入れて欲しい。たとえば南町コミセンは、「太陽光発電システム推進プロジェクト」を、市の環境政策課と市民協働推進課と協働をスタートしたところだ。プロジェクトチームの運営そのものも含めて、対等な関係でやるという約束で始まっている。

今後こういった協働の模索があるだろうから、行政の役割について、の中に書き込んで欲しい。

(高田委員長) さらなる論点ではないのか。

(西村委員) こだわってはいないが、行政の役割の中で、行政とコミセンとの協働に触れるのが適切だろう。

(高田委員長) 江上副委員長の思いだと、それぞれの課題、人と人とのつながりからいろいろやって、対話が出てきて、そして問題が出てくるころまでが、われわれの報告書だ。それからその課題について協働として乗り出すとすると、それはさらなる課題になるのではないかな。行政との協働というところを、われわれの報告書に含むかどうか。

(江上副委員長) どこにどう書くかは、問題ではあるが。

(高田委員長) 課題のところまでやって、管理運営に四苦八苦しているコミセンを超えて、コミュニティづくりに乗り出すところまでを目標にする、という形で、基本的なところをこちらで提言する。そこから、今度は協働というところに。協働は1つの目的があって、目的に関しての話なので、個別だ。変にやると協働というのは癒着してしまうので、それぞれのところでうまく離れないといけない。協働の1つの特徴として、時限性がある。限定されている。さらなる論点で書くことにしよう。

(江上副委員長) 18 ページの一番上の囲みの「べきである」という表現は、「するのがよい」や、「好ましい」としたほうがいい。それから一番下に側面的なその他の支援の例が載っているが、シンポジウムを開く、窓口研修をやる、などもっといろいろある。

なぜ、こう言っているかという、他の自治体の例を見ると、市役所側が協働のネタをいろいろまいて、それに市民を寄せてきて、結局最後は下請けになることが多い。それは要注意だ。

(西村委員) もう1つ、行政のところについて。今は分からないが、かつてタウンミーティングをコミセン単位でやったことは、大きな協働だったと思う。

(事務局・盛田) 今も基本的にはコミセンと協働でやっている。

(西村委員) その収穫物というか、その値打ちのようなものがある。

(高田委員長) それを協働で解決するということになるのか。

(西村委員) テーマによっては、行政と一緒にだし、コミセンの中で話し合っ解決する問題もある。仕分けはコミュニティ協議会で行うが、普段の生活の中ではコミセンに来ないような問題や課題がたくさん出てくる。

(高田委員長) 地域の課題ということか。

(西村委員) 半分は地域の課題だが、半分はベース的課題だ。「あっ」と思うような新しいものもある。

(清本委員) それは相手が市長だからだろうか。

(高田委員長) 細かいところで、意見をお願いしたい。

(井原委員) コミュニティとコミュニティ協議会、コミュニティセンターは違うものとしてやっているということ、できれば前のほうに、ひと言入れていただきたい。

(高田委員長) コミセンと協議会とコミュニティを分けて考えているということだね。

(渡邊委員) 最後にさらなる論点とあるが、その提起はないのか。

(高田委員長) 協働についての何らかの記述になるだろう。

(西村委員) 小さいことについて2つある。1つ目は、9ページの自由意見の例に3つあるが、3つ目の意見の「ボランティアが必要なのではと思っています」というのがピンとこない。

(高田委員長) これは自転車を通るからだろう。

(江上副委員長) 放置自転車のことだ。

(西村委員) こういう状態があるのは理解できるが、「安全できれいなまちづくりのため

に市民のボランティアが必要なのではないかと考えています」という意見は、ここに入るのか。

(高田委員長) これはボランティアが自転車の整理をするということか。

(西村委員) もう1つは21ページの新しいコミセンのところだが、最後の1行の「そこで、意見集約に向けて、市と情報交換などをおこなっていくこととなっている」という文章を変えたい。市との情報交換がメインではない。ひっくり返して欲しい。

(事務局・森安) 「市と情報交換をしながら、意見集約に向けて活動をおこなっていくことになっている」としてはどうか。

(和久田委員) 20ページの防災の拠点としての機能のところの「小中学校等他の防災拠点との関係も踏まえつつ、防災の拠点としての機能を持たせることができないかも検討する」の意味が分からない。「防災の拠点としての機能を持たせることができるかを検討することも必要である」と直したほうがいいのではないか。

(高田委員長) コミセンが防災の拠点ではないので、このような表現になっている。

(増田委員) 行政の側面支援の役割は、活動が滞ったりした時に、協議会が市からアドバイスをもらいたい場合に、たとえばアドバイスや、助言を行うということでもいいのか。

(高田委員長) コミュニティ協議会から要請されたら動くということだ。せっかくだから、行政のコミュニティ支援の三原則を作ったらどうかと思うが、これは次にする。

(事務局・盛田) 防災の拠点の機能の点だが、施設の改修に係る場所だけではないという、井原委員の意見だったので、その辺を工夫して、「改修に限らず、そういった機能を持たすことができないか検討する」という表現にしたらどうだろう。この流れだと、改修の中でおこなうことになっているので。

(高田委員長) この項目から出すのか。

(事務局・盛田) 出さずに、条件として、その他というところにつけ加える形だ。

(和久田委員) さらなる論点のところは、協働についてということだが、それは行政との関わりだ。さらなる論点では、イベントを通じて知り得た人同士がつながりを持って、それを続けて、違った方向に発展していくということを、ここに入れなくていいのか。コミュニティ活動も生きがいになっていく、といったこともここに入れなくていいのか。

(高田委員長) 協働を重ねていくことによって、ということか。

(和久田委員) それは別で、協働だけではないのではないか。

(高田委員長) 協働に加えてということなら、それもさらなる論点だろう。

(渡邊委員) 傍聴者から提案があった。第五期の市民委員会の答申では市民条例をつくるということがあった。その時に市民の役割など、いろいろ出た。それからの変化、条例ができあがり、次に評価委員会があり、それから指定管理者制度が入った。そういったことを踏まえて、かなり制度的な意味の情勢が変わってきた。それがコミュニティ協議会のコミュニティ活動の活性化との関係で、どのような問題点があるのかを、問題点として指摘したほうがいいのではないか。

指定管理者制度の場合は条例改正があった。その時、至上命令のように、それに整合性を合わせるような条例改正がおこなわれた。また、この間の論議の中でも、委員長から指定管理者制度で、早くしないとNPOがやってしまうという話があった。そういったことでそれぞれ協議会の受け止め方にかかなりの影響力を持つ。その点について、第五期からの制度的な大きな改革についての問題点や意識は指摘してもいいのではないか。

(西村委員) 書く、書かないはともかく、指定管理者制度が入ったことで、何が変わったのか、変わらなかったのか、コミセンが変わったと思っているところもある。

(高田委員長) 指定管理者制度が入ったことで、変わったのか。

(西村委員) 今度の議会で議決されると、向こう5年はまた引き受けることになるが、指定管理者制度になったという理由で、いくつか出てきている。納得することもあるし、何となくそう思い込んでいるところもある。

(高田委員長) 現場の人はどうだろう。指定管理者制度になったことで、何かあるのか。コミュニティ協議会は協議会のままだが。

(西村委員) たとえば監査が厳しくなることは、納得している。

(橘委員) 大きな瑕疵がこちら側にあるコミセンは、まずいと思っているかもしれないが、大過なくやっているところは、5年延長だろうと10年延長だろうと、従来と変わりがないのではないか。

(西村委員) たとえば委員長の責任が大きくなる、裏返せば権限が強くなる、というような言われ方はないのか。

(高田委員長) 可能性としては、NPOが取って代わる可能性があるが、実際の運用では、そうっていない。そういった可能性のところも含めて、書いておくのか。

(西村委員) 責任が重くなるということと、その裏返しとして、委員長の権限も強くなるという言われ方は、根拠がないなら、書く必要はない。

(渡邊委員) そういったことで誤解のないように、条例を決めるためにあれだけ大きく

動いてやってきて、それから時間が経って、その条例が、指定管理者制度が入ったことで改正された時には、実務的だったのかもしれない。評価委員会の時には、いろいろな心配、危惧、異論がたくさんあった。それが今、委員長が言う通りになった。どう機能すればいいかは別として、評価員制度そのものがコミュニティ協議会にどのような影響を及ぼすことになったのか、少なくとも問題提起だけはしたほうがいいのではないか。

(清本委員) その話が、今までこの委員会で出なかったのが、不思議だった。やはりきちんと俎上に乗せるべきではないだろうか。

(高田委員長) それは、さらなる論点か。

(渡邊委員) そうだ。

(橘委員) 逆だろう。指定管理者制度が設けられたために、法的な裏付けができたという取り方はできないか。

(高田委員長) 考えておく。時間になったので、終わりにする。

・次回 第17回委員会 12月3日(木) 午後6:30～ 市役所811会議室

[了]